

普及活動情勢報告（平成31年2月分）

須崎農業振興センター高南農業改良普及所

「手摘四万十茶」の品質向上を目指して ～四万十茶支援チーム会の開催～



煎茶の飲み比べをする
チーム員

1月30日、農業技術センター茶業試験場で、四万十茶支援チーム会を開催し、関係者11名が参加しました。

本チーム会では、茶業試験場の協力を得て県内3産地の茶と飲み比べ、参加者で十和地区の「手摘四万十茶」の味や特徴を共有したうえで、栽培方法や製茶加工技術の改善策などについて検討しました。

茶業試験場からは、成分値では他産地と遜色がない、品質を上げていくためには、施肥や製茶加工時の温度、商品規格などの改善を行ったらどうかなどの助言がありました。

普及所は、四万十茶支援チーム会のメンバーと連携し、四万十茶の販売拡大の取組を支援していきます。

スマート農業の実用化に向けて ～中山間農業複合経営拠点フォロー会議の開催～



意見交換をする関係者

1月31日、普及所で、複合経営拠点である営農支援センター四万十(株)への事業戦略サポートセンターによる実行フォローアップ会議が開催され、関係者13名が参加しました。

新たな事業戦略として、応募が開始されている国費事業を活用して経営・栽培管理システム「アグリノート」によるほ場情報や労務管理の可視化、自動運転トラクター、田植機、自動航行ドローン等の導入による作業能率の向上に取り組んでいきたいことなどを関係者で情報共有しました。

普及所は、関係機関と連携して、スマート農業の実用化に向けた取組を支援していきます。

施設ミョウガで土壌還元消毒を実証 ～補足法によるピシウム菌密度の検査の実施～



菌密度を検査する
普及指導員

2月4日、興津地区で、低濃度エタノール土壌還元消毒の実証を行ったミョウガほ場（2箇所）の処理後の菌密度を検査しました。

全面処理区ではピシウム菌は検出されませんでした。スポット処理区では下層から検出され、消毒範囲が狭いスポット処理では、処理方法に課題を残しました。

実証農家からは、「次作から従来の土壌消毒方法ではなく、低濃度エタノールによる土壌還元消毒に変更したい」といった声が聞かれるなど、新しい土壌消毒技術に期待している様子でした。

普及所は、関係機関と連携して、低濃度エタノール土壌還元消毒の実証と普及を進めていきます。

来年美味しい柿が食べられますように ～はちきん農業大学第7回高南地区講座の開催～



指導を受け剪定する
受講生

2月6日、普及所で「家庭果樹の剪定術」をテーマに、今年度最後の高南地区講座を開催し女性農業者3名が受講しました。

普及所は、柑橘類や柿などの剪定の基本技術の講義と、受講生の家柿の剪定実習を行いました。

実習では「知らずに花芽を切ったら実はつきません」などポイントを説明しながら剪定しました。受講者からは、「何年も手がつけられなかった柿の木がスッキリして良かった」「実のなる頃にもう一度見に来て。来年もぜひ講座を」と好評でした。

普及所は、今後も地域の女性農業者のニーズに応じた講座を開催するなど講座の充実に取り組んでいきます。

園芸品目による大規模経営を目指して ～中山間農業複合経営拠点先進地調査の開催～



JA愛媛たいき営農指導員
から栗の説明を受ける生
産者ら

2月15日、複合経営拠点である（一社）四万十農産が愛媛県の先進事例調査を行い生産者16名が参加しました。

事業戦略として昨年栽培を開始した栗について、栗産地である内子町のは場で産地の状況や栽培技術について学びました。また、キャベツやタマネギの大規模経営を行っている大洲市の（農）たいよう農園では、タマネギの選別作業の見学や、経営内容の説明を受けました。

参加者からは、たいよう農園の取組について「規模が大きすぎる事例ではあるが、生産から加工までの成功事例である」「作業が機械体系により効率化されている」「若者を積極的にポストにつけ、うまく運営されている」など参考になったと感想が聞かれました。

普及所は、関係機関と連携して、園芸品目による大規模経営の取組を支援していきます。

「JA高知県四万十厳選にこまる」のブランド力を強化！ ～米販売促進活動の開催～



消費者にアンケート
調査を行う生産者

2月15日から17日に、東京都の米穀店（株）スズノブで、「JA高知県四万十厳選にこまる」の販売促進活動を行い、生産者等6名が参加しました。

普及所とJAで作成した、「にこまる」の品種特性等について取りまとめたPR用パンフレットを消費者に配布しました。また、普段食べている米の購入基準などについてのアンケート調査も行い、174名から回答を得ました。回答者の約8割を女性が占め、「粒はりがあり、甘みがある」といった意見が多くありました。生産者からは、「消費者の価値観やお米に対するこだわりを実感できて良かった」などの感想が聞かれ、今春の水稻の作付けに意気込んでいました。

普及所は、今回の調査結果も踏まえ、生産者やJA等関係機関と一体となって、ブランド力の強化に取り組んでいきます。